

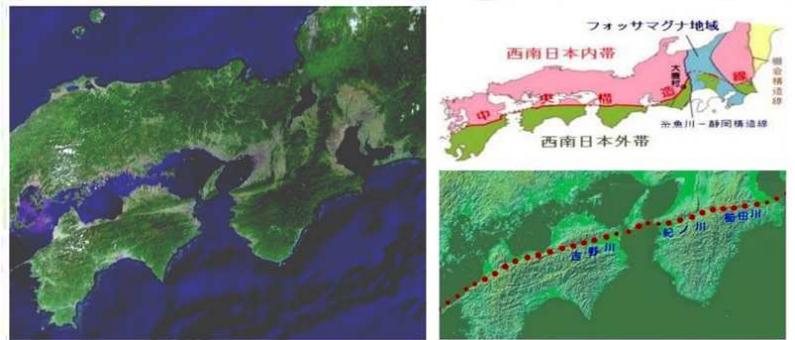


四国を東西に一直線で貫く大断層「中央構造線」 そそり立つ山並みの裏に消えてゆく銅山の村

最近 日本を写した人工衛星写真の地形図がインターネットで自由に見ることができるようになって楽しんでいる。

そんな中に 紀伊半島から四国を一直線に貫く大断層帯「中央構造線」が見える。

四国の北よりを真っ直ぐに東西に貫き、その南側には平行して東西に幾重にも重なる四国の山々が連なり、太平洋に面する高知の海岸部にまで、大きな町はなく、この山々を横切ってゆく道もほとんど限られ、険しい山塊である。 ストレート一直線に



並んだ山々が並行して幾重にも連なり、今も之を横切る事を寄せ付けずにいるすごい断層である。山の谷間を平行して抜けてゆく道はあっても、山を南北に抜けて 高知・太平洋側に出る道はわずかに四国中央部の山の切れ目を大歩危の難所を吉野川と共に南へさかのぼって行く谷筋があるのみである。



四国の北東半分では幾重にも重なる山々から流れ出した吉野川がこの大断層に沿って谷を東に流れくんだり、北

西半分では中央構造線を境として北側に平坦な平野部 南側には急峻な山がそそり立って西へ伸びている。

以前 仕事でよく行った東予から いつも眺めた山々である。



新居浜の南 中央構造線に沿ってそそり立つ赤石山山系 2005. 11. 29.



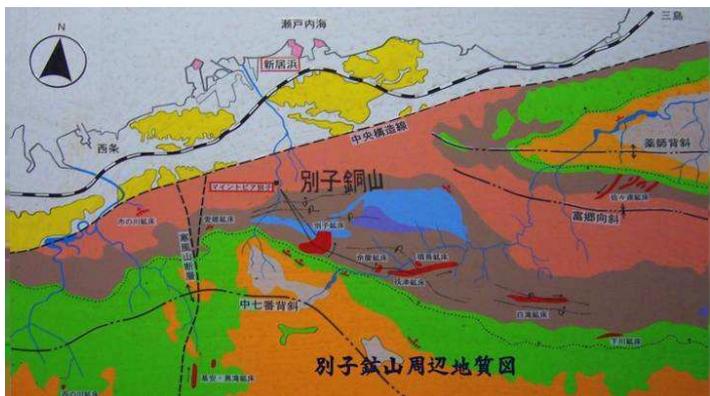
中央構造線上 伊予三島の山上から見た東予の平野部

新居浜の街

そんな東伊予の中心に新居浜があり、新居浜の南の壁を越えた向こう側には江戸時代世界一の出銅量を誇った別子銅山があり、「住友」発祥の地である。

東予・新居浜に行っても 別子銅山の銅の話は聞いても 銅山のある別子山村への道などあまり聞いたこともなく、閉ざされた場所それが「別子銅山の郷 別子山村」のぼくの印象でした。

材料屋の原点の一つとして 一度は是非足を踏み入れたいと思いながら、忘れかけていました。



昨年 ある知人が「別子山村へ入って 別子銅山遺跡を見てきた。機会あれば・・・」と教えてくれた。ちょうど 人工衛星写真で四国の中央構造線に引かれていたこともあって、「眠っていた赤子を起こされたようなもの」でした。

調べてみると 別子山村は平成 15 年 4 月に新居浜市と合併。

当時人口は 277 人と激減。前年には一人も赤ちゃんが生まれなかったという。

今 どうなっているのか・・・

「たたら 和鉄の郷」と同様 材料屋の原点の一つ 山に生きた人たちの痕跡がある間に行きたくなりました。また、住友の街 新居浜の別子銅山博物館にも行ってみたい。

11 月 ちょうど 松山に行く機会があり、その用件半分 別子山村を訪ねるのが半分で別子山村を訪ねました。それも、神戸から明石大橋を通過して鳴門へ出て、そこからこの四国を東西に真っ直ぐに貫く大断層地帯「中央構造線」沿いに沿って 真っ直ぐ松山まで伸びる高速道路を走る神戸発松山行の高速バスに乗って。行けばなんとかなるだろうとのいつもの風来坊。 たかをくくって出掛けましたが、全く山の中で交通の便悪く タクシーと交渉して 素晴らしい紅葉の別子山村をタクシーで駆け抜けるだけの旅になってしまいました。

(新居浜からは車でないと別子山村へ行く道はなく、タクシーも迷惑顔。伊予三島からは赤石山をトンネルでぶち抜いたダム道路が観光兼生活道路としてついており、日に 3 本バスが走っている。 僕も朝 このバスに飛び乗ったのですが、運転手さんにどこに泊まるの。このバスの折り返しに帰ってこないともう バスないよ・・・と。

あわてて 飛び降りました)

赤石山系の山々によって 市街地から隔てられた谷底 銅山川に沿う一本道だけが頼りで、 もう村の中心部もなく、ぽつぽつと家が散在するだけの全く山中の別子山村が紅葉の中に埋もれていました。



四国 別子山村 赤石山系 銅山峰霞頂 2005.11.9.



四国 別子山村 赤石山系 銅山峰霞頂 2005.11.9.



四国 銅山の脚 別子山村の秋 2005.11.9.

赤石山系の谷間 銅山川に沿う別子山村 2005.11.9.

別子山村の中心部を抜け、別子ダムにかかる手前に旧別子銅山跡入口の標識があり、階段の登山道が山腹に向かってついている。

旧別子銅山はこの谷間 赤石山の山腹に坑口や諸施設が眠っており、見上げる赤石山を越える「銅山越」の険しい山道を越えて 銅が新居浜側に運ばれた。明治になると反対側の新居浜側の山腹をぶち抜いて掘られた隧道が鉱脈に伸び、そして 軌道が新居浜にまで粗銅を運ぶようになる。



今もこの銅山越の山道沿いに旧別子銅山遺跡が残っているのですが、タクシーを放すと身動きが取れなくなるので、残念ながら、今回はあきらめ。

そのまま別子ダムからトンネルで赤石山系の山々を抜けて 新居浜側の端出場かつての別子銅山の銅集積場にある別子銅山の観光モニュメント別子トピアに出てきました。

紅葉の中 見上げる赤石山 銅山峰はごつごつした岩肌で 銅の露頭を見せていました。

これ 見ただけで 満足。

でも やっぱり 次回は銅山越をせねば・・・もう一度赤石山登山を兼ねて行こうと思っている。

幸い 来年には 新居浜側から別子山村への道も改修され バスが走り出すという。

新居浜からは ほんと 山を乗り越えた直ぐそこなんです、車がないとどんどん不便になってゆく僻地をまざまざと経験。早く道が改修され、交通の便が良くなれば、本当に素晴らしい場所なんです・・・

■ 銅の露頭が見える赤石山系の谷底 銅山川に沿って東西に伸びる別子山村 概要
別子山村を貫く一本道 別子・翠波 はな街道





別子山村愛媛県のほぼ中央に位置し、四方を標高 1,500m~1,700m級の山々で囲まれており、雄大で優美な自然の魅力を満喫することができる。瀬戸内の海岸との壁として北側から村を見下ろすように聳え立つ赤石の山々は、西で石鎚連峰からの稜線に連なる。

現在、別子山村は平成の大合併により、2003（平成 15）年 4 月隣接の「新居浜市」と合併「新居浜市別子山」となった。旧別子山村は 2000（平成 12）年国勢調査時の人口で 277 人という状況にあり、また、2002（平成 14）年の人口動態統計によると、全国の市町村で 1 人も赤ちゃんの生まれなかった村が一つでもあった。東西に伸びる赤石山系の谷間を流れる吉野川の分流 銅山川が西から東に流れ、この川に沿って延びる県道が唯一海岸部の川之江・新居浜との連絡路。

特にこの銅山川沿いの短い区間に 3 つものダム湖があり、川之江・伊予三島からの立派な道が村の中心部まで伸びている。一方 村の東側の新居浜側には別子ダムがあり、赤石山を貫くトンネルで繋がっているが新居浜まで険しい山を下ってゆかねばならず、道幅も狭く、今 道路改修が進んでいる途中である。

車であれば、約1時間ちょっとで 川之江から別子山村の山間部を通って新居浜まで下ることが出来るが、過疎の地 日に3本のバスが川之江・伊予三島からあるだけである。

(来年には 新居浜へもバスが開通すると聞く)

村の中心を占める別子銅山はもともと銅山越 そして 鉱山トンネルを通じて 新居浜との結びつきが強かったため、新居浜との結びつきが強く、平成の大合併により、2003(平成15)年4月隣接の「新居浜市」と合併「新居浜市別子山」となった。

■ 【参考】 四国・紀伊半島の中央構造線



構造線とは地質帯の境目をなす大きな断層のことで、中央構造線は日本を代表する大構造線。西南日本内帯・外帯の境界にあたり、徳島市から吉野川北岸を走って阿波池田に達し、川之江・新居浜のすぐ南側を通り、砥部町から双海町を通り、佐田岬半島北側の沖合を通り豊予海峡に入る。

豊予海峡では、佐賀関半島と佐田岬半島の北岸の沖合いを通して、伊予市上灘で上陸。砥部(とべ)町から西条(さいじょう)市の丹原(たんばら)へ続く。そして、石鎚山地のふもとを新居浜から川之江へ続き、阿波池田から吉野川の少し北側を徳島市と鳴門の間へ続く。



四国と紀伊半島の間では、淡路島南岸と沼島(ぬしま)の間を通して紀伊半島に上陸し、紀ノ川や紀ノ川上流の吉野川の少し北側を、和歌山市~奈良県の五条~東吉野~三重県境の高見峠へと続く。

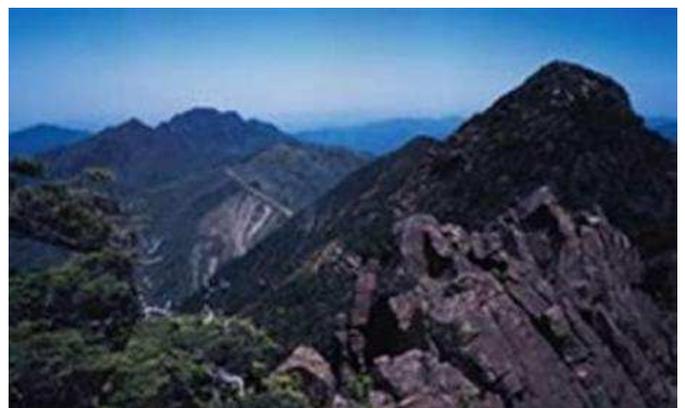
四国中央構造線の基本的な姿は三波川変成岩と和泉層群の境界断層である。

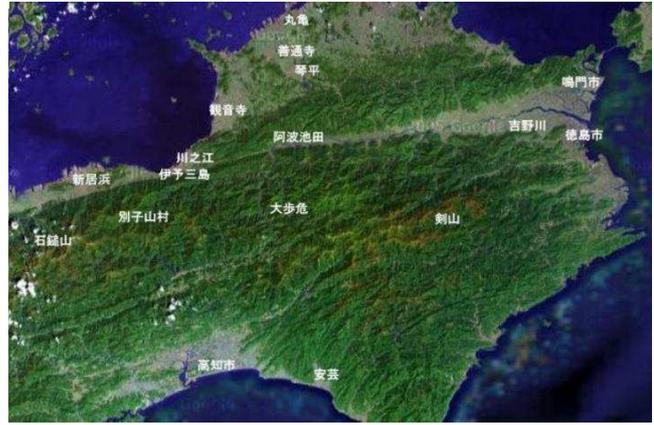
愛媛県新居浜市国領大橋付近の平野部より南東を見ると遠方の山並みの麓を中央構造線が東西(左右)に走り、それより南側では三波川変成帯が大きく隆起して険しい山脈になっている。

三波川変成岩は広く露出し、徳島の城山、祖谷地方から大歩危、別子、佐田岬半島などでよく見られる。

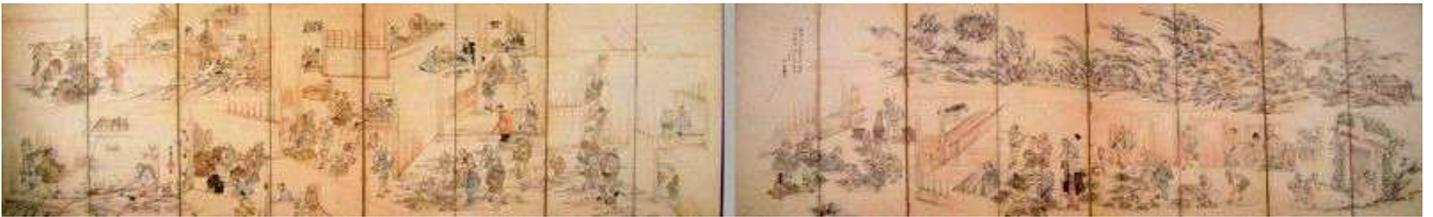
ただし石鎚山は新第三紀の火山岩である。

四国山地北縁ではナイフで切ったように直線状に山が並び(断層崖)、その航空写真が活断層の見本として各種書籍に取り上げられている。

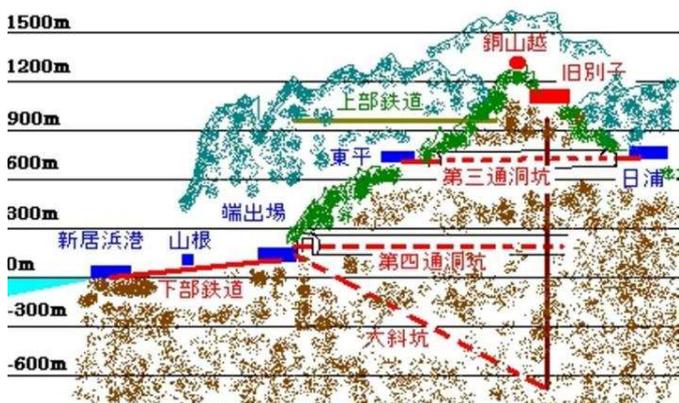




2. 別子山村 旧別子銅山遺跡 概要



人跡未踏の赤石山 銅山峰南斜面で、元禄3年(1690年)露頭が発見され、翌年住友により採掘が開始されたのが始まり。



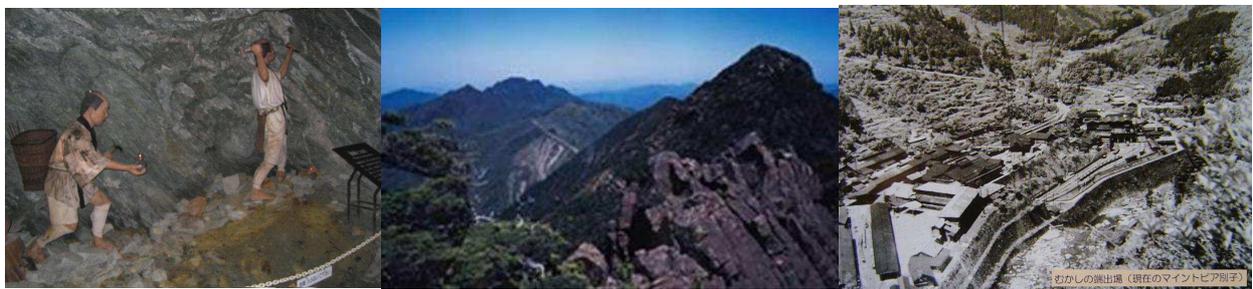
別子銅山の模式

海拔1145mの地帯から斜めに深く、長く掘られた大料坑は非常に珍しく銅鉱脈は世界でも類のない大鉱床だった。

元禄時代幕府の長崎貿易の代金支払いが銀から銅に代わり、銅が最大の輸出品になると、幕府は銅山開発に力を注ぎ始め、別子銅山も開抗からわずか8年の元禄11年に年間産銅量1,500トン以上を記録するなど、当時世界最高の産銅量を誇る銅山となった。

その後、明治26年には日本初の山岳鉄道を導入、産銅量は一挙に5,000トンに達し、別子の山中には12,000人ももの鉱山関係者が住んだと言われている。
坑道の総延長約700km、採銅場所が海面下1,000mに達し、浸透水と地圧による坑道崩壊の危険などにより、昭和48年最後の筏津坑の閉鎖により栄光の歴史に幕を閉じました。

現在では、それらの施設はほとんど残っていないが、銅山越への山道を歩くと坑口跡や高く積まれた石垣・接待館の煉瓦塀等 別子銅山の痕跡が点々と残っている。



露頭が発見されたのは、人跡未踏の赤石山 銅山峰南斜面(1690年)。最初の坑口歓喜坑は海拔1145mの地帯であり、そこから斜めにこの山体の奥深く下へ下へと長く掘り進められた。

1691年-1973年の283年間の長きにわたって、高度1145mから順次 地下マイナス600mを越える深さまで、地中の底へ底へと掘られたきわめて珍しい大鉱脈。

採掘された銅鉱石は銅約80%粗銅(荒銅)に製錬されて 海岸地に運ばれたが、この場所は人跡未踏の地であり、人力で運ばねばならぬ時代 銅の輸送路はきわめて重要であり、しかも銅山そのものも、時代と共に山体の奥深いところで、採掘場所が下へ下へと下ってくる。 鉱山内での採取された銅鉱石の坑道内部からの運び出し、そして この険しい山を越えて荒銅・銅鉱石を海岸部まで運ぶ輸送路の確保が江戸期から・明治・昭和にいたるまで、世界的な大銅山別子銅山の近代化の重要な柱であった。

江戸期の延々35kmにわたってまで山越え道が続く小箱峠越の泉屋道から8kmの短経路 悲願の輸送路銅山越の道への転換 そして 明治の近代化策として時代と共に数度にわたり、新居浜側から3体をぶち抜いて下方に作られた鉱脈への通洞ならびに大斜坑の建設 そして 上部・下部の鉱山鉄道の建設などである。

今回 別子銅山の山中に分け入り、それら産業遺産を見ることはできなかったが、山岳地図にそれらの位置を書き込むとそのすごさがわかる。

逆に言それだけ重要な鉱山であり、明治以降 日本の近代化の源泉であったことがふつふつと浮かび上がってくる。

別子銅山の歴史

【江戸期】

江戸期 別子銅山開坑時 この銅山のある足谷山から一番近いのは銅山峰を越えて北側の新居浜へ至る道が直線距離約 8km と最も近いのであるが、西条藩領でここにすでに立川銅山が開鉱されており、別子銅山と鉱脈が近接・通じていることもあって、この道を開くことが出来ず、銅山峰南側を銅山側沿いに西へ進み 芋野から北進して赤石山を小箱峠で越えて 浦山川沿いを現在の土居町天満浦へ出る延々約 35km 道が輸送路であり、人馬によって延々運ばれた。 この道はこの地域に住む人々を潤し、「泉屋道」と呼ばれた。

現在の別子山村の中心部を西へ銅山川沿いの溪谷を縫い、村の端で北へ小箱峠で山を越えてゆく道である。

一方 輸送効率のよい銅山峰を越えて 立川から新居浜へ結ぶいわゆる「銅山越」の道が幕府より認められ建設されたのは別子銅山開鉱後 10 年後であり、その後この道が輸送路の本道となつて、別子銅山を支える。

- 泉屋道 足谷山→芋野中宿→小箱峠→
勘場中宿→浦山→天満浦
- 銅山越道 足谷山→銅山越→角石原→
馬の背→東平→立川渡瀬→新居浜浦

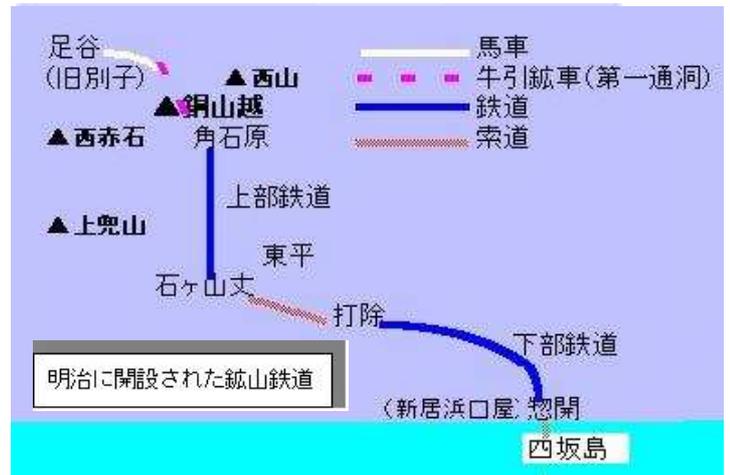


江戸期の別子銅山 銅の輸送路 仲持道

【明治以降】

明治になると大量生産を効率的に進める別子銅山は採鉱・輸送・製錬・労働などあらゆる面で時代の流れの中で近代化の变革をする。

いわゆる近代化産業遺産と呼ばれる諸設備・鉱山鉄道が導入される。

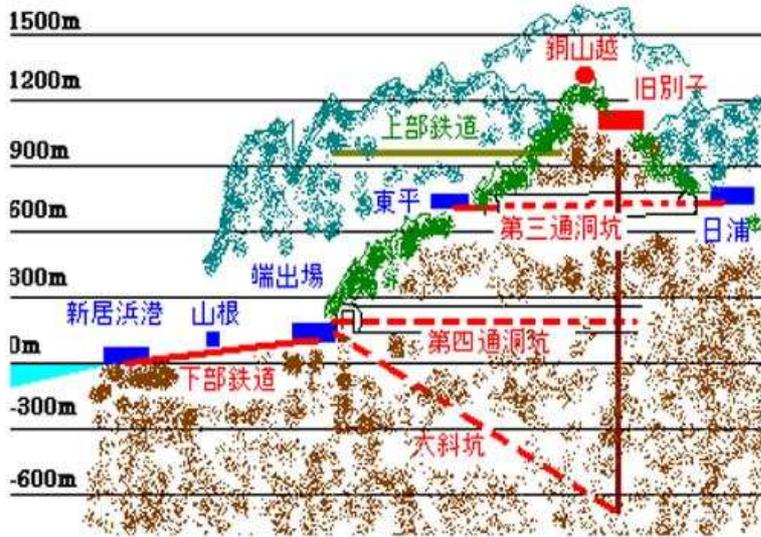


- 1880年 足谷川に面する高橋製錬所の建設と東延斜坑の開削と別子から立川までの運搬車道の整備
- 1886年 第一通洞の開削 東延から角石原
- 1888年 石炭を木炭代替とする新居浜臨海部の惣開・山根製錬所の建設
- 1893年 別子鉱山鉄道 下部鉄道：端出場⇄惣開 上部鉄道：角石原⇄石ヶ山丈
石ヶ山丈⇄端出場の索道の開通
- 1895年 東延斜坑の完成
- 1899年 第三通洞の完成と東平開発 東平の時代
第三通洞の開削（東平坑⇄東延斜坑底の水平坑道）と 209 年にわたる別子山での製錬に終止符。
1895 年煙害問題での山根製錬所の廃止 1899 年別子大水害による高橋製錬所の廃止で 209 年にわたる別子山での製錬が終止符。
四阪島での製錬がはじまるまで、新居浜（惣開）での製錬に頼る。
- 1904年 四阪島製錬所の完成と別子・角医師原での焼鉱 新居浜での粗銅・精銅生産の中止と四阪島での生産集中
- 1911年 第三通洞東延斜坑底と日浦洞を結ぶ日浦通洞完成

すべての輸送が東延斜坑⇄第三通洞⇄日浦通洞 経由で行われ、上部鉄道が廃止

1915年 第四通洞の完成と端出場の時代

1968年 戦後 別子銅山再生を賭けた深部開発と大斜坑の完成



3. 紅葉の別子山村 写真アルバム 2005. 11. 9.

紅葉の別子山村 別子銅山の郷をタクシーで駆け抜ける



11. 8. 夜遅く駅前の飯屋でビールやりながら、色々教えてもらったのですが、「新居浜からは現在、道が悪く、車・タクシー以外に別子山村へのアクセスなし。でも 川之江・伊予三島からはダム建設でよい道がついていてバスの便がある。なんせ 人口 277 人しかいないところだから そのつもりで」と言われる。まだ その時は飲みながらたかをくくっていたのですが・・・
朝 新居浜から川之江行のバスに乗り、道中 運転手さんに別子山へのバスの便など聞く。「川之江からのバスも一日 3 本しかなく 乗っていった午前中のバスが折り返す午後の便で戻ってこない」と帰れない。山へ入るなら タクシーもなにもみんな伊予三島の方から行く。宿とらないと・・・ でも 今紅葉が本当に素晴らしい」という。
このまま断念するのもいや。
「伊予三島から山を越えて せめて銅の露頭を見せる赤石の山々を眺めながら 別子山村を駆け抜けて 新居浜側へ出て 端出場にある別子銅山の観光モニュメント施設「別子トピア」・山根にある和銅博物館を訪ねる」アイデアが頭に浮かぶ。
伊予三島駅前降りて タクシーとディスカウント交渉して、スタート。
ラッキーだったが、やっぱり ちゃんと計画していかないとあかんとつくづく思う。
でも これも旅。
ところどころで ストップしてもらいながら 約 1.5 時間ちょっとで 端出場までのドライブ。
「平野から突如 急峻な山々が建ち並ぶ。それも東西に伸びる断層の段差そのままに直線的に並んで。その山のむこうにはもう 集落のない山また山。そんな山中に世界的な大銅山 別子銅山が眠っている。山の向こうの別子山村って どんどこ ???」、興味深々のドライブ。
荒々しい岩肌の赤石山の狭い溪谷の紅葉の中に人影のない別子山村はうずもれていました。

3. 1. 伊予三島からまっすぐ南へ 中央構造線上の赤石山脈をトンネルで抜けて銅山川の溪谷へ 大段層帯 四国中央構造線の上に立つ
3. 2. 紅葉の銅山川 別子山村
3. 3. 別子ダムから大永山トンネルを抜けて 別子溪谷を新居浜側の端出場へ
3. 4. 別子トピア 端出場
3. 5. 新居浜 山根の和銅記念館

3.1. 伊予三島からまっすぐ南へ 中央構造線上の赤石山脈をトンネルで抜けて銅山川の渓谷へ 大段層帯 四国 中央構造線の上に立つ

愛媛県東部の瀬戸内側海岸の平野部から南に壁のように東西にそそり立つ標高 1,500~1700m クラスの山々赤石山系・法皇山脈。中央構造線の大段層帯の上の山である。

伊予三島からトンネルでこの山系を抜けた南側の奥深い山中を東西に流れる銅山川沿いの渓谷を楽しみながら東に進みまたトンネルで北に山を抜けて、国領川沿いに新居浜に至る全長 6.5km の観光ドライブコースが、

「翠波・別子はな街道」として整備されている。この銅山川沿いの東半分の渓谷が旧別子山村で 荒々しい岩肌を見せる赤石山系の一番東の端に銅の露頭を見せる銅山峰がそびえ、人跡未踏のその周辺が別子銅山である。タクシーに乗ってこの街道筋を走る。

伊予三島の駅から南へまっすぐ山に向かい平野部からいきなり急峻なつづら折れの道をぐんぐん登る。

人工衛星の地形図で見ると中国山地の山々が垂直に平野部に切れ落ちた境界が延々東西に続く中央構造線の境。

伊予三島・川之江の市街地が見る間に下のほうになってゆく。



遠望する川之江市街地と赤石山系の山並みへ上ってゆくドライブウェイ

この急峻なつづら俺の道が断層の下から上へ上がる道。

10 ほどのところ 赤石山系の山並みを抜ける手前の展望台から東西に沿ってひろがる平野部が見渡せ、東西にストレートに伸びる中央構造線の断層の先端に立っていることを実感する。



中央構造線の上にある具定展望台から見る四国中央構造線沿いの平野部 2005. 11. 9.

本当にこのストレートのライン「どんなところか???'と興味深々で想像をめぐらしていましたが、やつぱり急峻な崖が平野部から垂直に立ち上がり、山並みを形成していました。



法皇トンネルを抜け、金砂湖を経て 富郷ダムへ

2005. 11. 9.

東西に伸びる赤石山系の山腹をまっすぐ突き抜ける法皇トンネルを抜けると奥深い山中。ぱつと紅葉が目に飛び込み、水を貯めた金砂湖が見え、溪谷を西から東へ溪谷を流れ下る銅山川水系の谷あいに入ったことがわかる。銅山川に沿う曲がりくねった谷間の道を走る行く手に岩峰の東赤石山が見えてくる。運転手さんによると「この銅山川の短い区間に3つもダムがあり、そのダム建設でこのいい道がついた。別子山村はこの富郷のダムを越えて もっと奥で ポツポツと家があるだけ・・・」と。



銅山川沿いの溪谷

2005. 11. 9. 3

富郷の集落を抜けると 溪谷はますます狭くなり、人家が全くなくなる。銅山川の石がどんどん大きく多くなり、この川が急進な山に囲まれた狭い V 字谷を駆け下る暴れ川であることが想像できる。 登るにつれ益々紅葉の色が濃くなり、狭い溪谷・富郷ダムを抜けると知らぬ間に別子山村に入る。 車も人影もまったくない紅葉した溪谷 銅山川に沿って、枝道のない一本道がどんどん登ってゆく。

3.2. 紅葉の銅山川 別子山村



銅山川沿いの V 字溪谷にへばりつく別子山村 2005. 11. 9.

紅葉した銅山川沿いの溪谷にぼつり ぼつりと一軒家が現れるが、まとまった家並みはない。伊予三島から車で40分ほどであるが、山に閉ざされた狭い溪谷でこの溪谷沿い以外に逃げ道はない。



ゆらぎの森への別れのところで、谷が少し広がっていて、幾つかまとまった人家が見える。あとから考えるとここが別子山村の中心地。ここから先は車がすれ違える程度の道幅になって さらに溪谷を登ってゆく。

地図で見た東西にえんえんと続くV字の谷である。川にへばりついた新居浜市支所をすぎるとまた自然の中に帰る。この右手 山並みの中に別子銅山のある岩峰の続く赤石山系であるが、谷が狭く、両側から山が迫って、頂上部の山並みは道がカーブする前方銅山川越しにチラッと見えるのみでよくわからない。



行く手に大きな石垣のある瓦屋根が見えてくる。地図にある南光院。

この南光院の横を通り抜けると道は山をジグザグに登り始め、あっというまに銅山川が下の方になる。



別子山村 余慶 南光院 2005. 11. 9.

山を登っていた道が下七番トンネルをくぐる。このあたりから別子銅山への道がついていた場所のように思えて、みす眼をこらして銅山への登り道を探す。

トンネルを抜けて直ぐ 旧別子銅山跡登山口の看板があり、おそらく駐車場確保整備の工事が進められていた。車を止めてもらって、登り口へ



別子山村の西の端 別子ダムへの登り道で 2005. 11. 9.



旧別子銅山登山口で 2005. 11. 9.

紅葉した山への階段がまっすぐ上へ続いているのみで 銅山山は見えない。

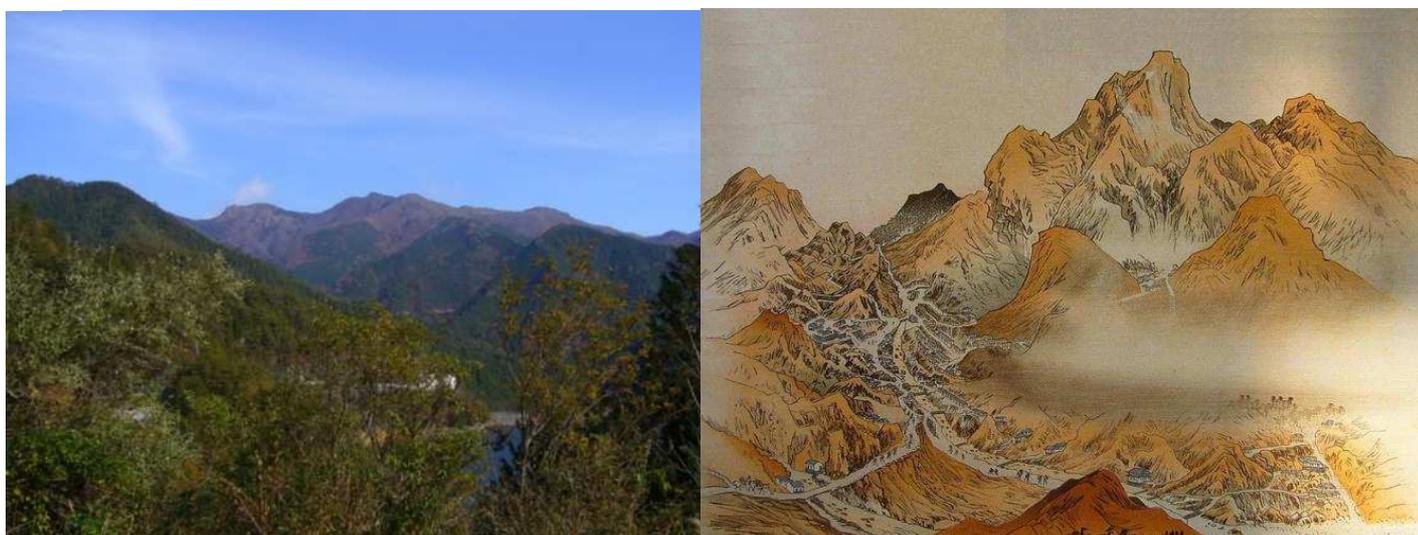
ここから旧別子銅山跡に入り、赤石山 銅山峰を越えて国領川水系の谷を下って新居浜への道が続いている。今はハイキング コースとして整備されている。その時には銅山越をしてさらに新居浜へのハイキングコースが整備されているのを知らず 一瞬 車捨てて歩こうか・・・と思ったのですが、あきらめて別子ダムへとまた上ってゆく。

別子ダムからは荒々しい岩峰を連ねる赤石山が東西に峰を連ねていました。

この岩峰が銅の露頭。山そのものが銅山。また 足元には別子ダム湖の向こうに今さかのぼってきた別子山村の谷が赤石の峰々に沿って、紅葉の中に埋もれていました。

「これは すごいわ 別子銅山の山とはこんなところか・・・」と感慨ひとしお。

しばし 連なる岩峰を眺めていました。



別子ダムからみた赤石山系 銅山越 別子山の峰々 2005. 11. 9.



別子ダムからみた赤石山系別子山の峰々 2005. 11. 9.



別子ダム周辺で 2005. 11. 9.

別子ダムから少し上って大永山トンネルで赤石山脈を越える。眼前まじかに荒々しい岩肌をみせる赤石の山並みが飛び込んでくる。非常に高い山の上にいることがわかる。

今度は北側から赤石山の急峻な峰峰を眺めながら 狭い国領川の谷筋へ降りてゆく。

紅葉が本当に素晴らしいつづら折れの狭いドライブウェイを下ってゆく。15分ほど下って銅山の里の標識東平への道と分かると端出場の別子トピアは近い。



新居浜側 別子ラインからの赤いし山の峰々 2005. 11. 9.

伊予三島から約 1.5 時間 東西に走る大断層帯 中央構造線の山巒 赤石山系銅山川の V 谷を東西に駆け抜けて新居浜の端出場まで 紅葉の溪谷のドライブ

どんなとこか・・・と好奇心・興味津々で出掛けたドライブでしたが、大断層中央構造線を実感し、荒々しい岩肌を見せて延々と東西に続く赤石の峰々とその下の紅葉の V 字谷銅山川の素晴らしい秋 そして別子銅山のすごさにもふれられました。

銅山越は果たせませんでした、素晴らしい紅葉の秋が体験できて満足。

様子もわかったので、もう一度 今度は銅山越 是非果たしたい。



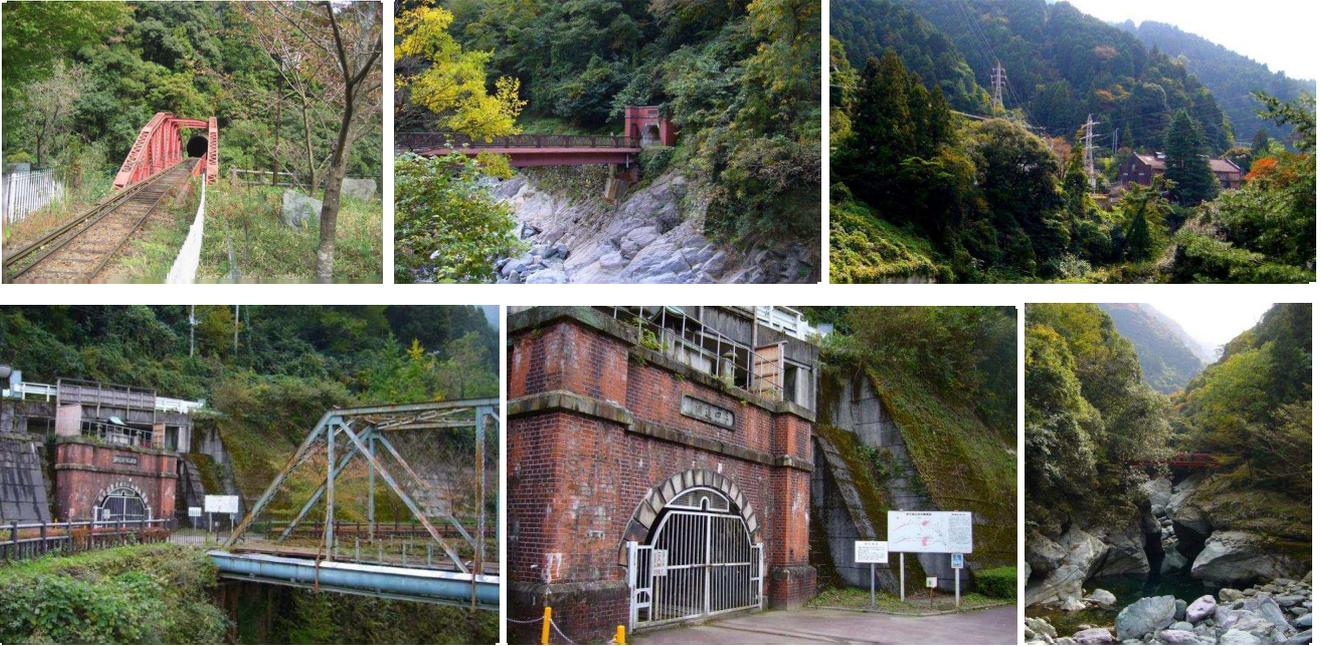
背後に別子山がそびえる端出場 2005. 11. 9.

3.4. マイントピア別子 端出場



マイントピア別子は別子銅山開坑 300 年を記念して旧別子銅山昭和期の一大拠点であった端出場に作られた鉱山観光施設で、端出場に残る第四通銅や鉱山鉄道などの産業遺産に観光坑道や記念館や温泉施設が併設されている。マインは鉱山を意味する言葉で、記念館・観光坑道の中には別子銅山の採掘の様子や鉱石などが展示されている。





別子銅山 端出場 産業遺産ほか 2005. 11. 9.
 上段 左 鉱山鉄道 軌道と鉄橋 中 観光坑道 右 発電所
 下段 左・中 第四通洞 右 国領川

3.5. 新居浜 山根の和銅記念館

端出場はちょうど別子山から山を下って国領川の川筋の谷への出口で、そこからさらに谷筋を 4km ほど下った新居浜の市街地への出口が山根である。この山根には湿式製錬所が 1888 年に建設された場所で、国領川左手の生子山山の頂上にはレンガ造りの煙突がみえる。

この山の山麓に大山積神社・別子銅山記念館がある。ぜひとも立寄りたかった記念館である。



新居浜市山根周辺 写真左 大山積神社・別子銅山記念館のある生子山 写真右国領川



別子銅山記念館



2005. 11. 9.



別子銅山は1691(元禄4)年の開坑から昭和48年の閉山まで一貫して住友が経営した世界でも例のない銅山。別子銅山記念館はその波瀾に満ちた銅山経営の史料を保存展示するために、昭和50年(1975年)に開館。住友連係21社で運営されている。その貴重な史料も散逸することなく継承され、記念館に収蔵展示されている。



館内は5つのコーナーにわかれており、住友とその前身である泉屋の歴史を紹介する「泉屋歴史コーナー」、銅山の開坑から最近の事業までを紹介する「歴史コーナー」、鉱石などを解説する「地質鉱床コーナー」、労働者の生活を展示した「生活風俗コーナー」、西洋の技術が導入されて以降の機材が並ぶ「技術コーナー」に分かれて展示されている。また屋外には、1892(明治25)年にドイツから輸入され鉱石運搬などに活躍した蒸気機関車なども展示されている。

大山積神社の境内にあるため、神殿より目立たないように半地下の構造にし屋上には「さつき」を1万本ほど植えています。それ故、ユニークなデザインが評価され、昭和51年(1976年)建築業協会賞を受賞。

<http://www.sumitomo.gr.jp/related/index02.html> より

別子銅山山内の作業を描いた別子銅山絵図や山内所施設を描いた別子御銅山絵図 別子銅山図(版画)などの絵図や銅の露頭 大山積神社に古式に則って奉納された鉱石などたら製鉄のイメージと比較しながら

興味深く見ました。

落ち着いた雰囲気の中で 別子銅山の歴史を知ることが出来、。展示図録とその解説 ならびに別子銅山の歩みを記録した資料などをもらって帰ってきました。

展示の内容は下記 別子銅山記念館ホームページに詳細掲載されています。

<http://www.sumitomo.gr.jp/related/index02.html>



大山積神社 境内 2005. 11. 9.

衛星写真で見える四国ををまっすぐ東西に走る大断層帯中央構造線 そして その上に壁のように立ちのぼる険しい赤石山系。かつて世界一を誇った別子銅山がこの山中に眠る。

この山の向こうはかつては銅山の銅を運んだ道が狭いV字の谷 銅山川に沿って続く別子山村。

本当に興味深々で想像を膨らましていた場所。

タクシーによる駆け足のドライブでしたが、銅露頭の岩峰 赤茶けた荒々しい岩峰を連ねる赤石山と紅葉に埋もれた谷 好奇心を満たしてくれる素晴らしいドライブでした。

まったく 予備知識なく好奇心のみの風来坊 失敗しましたが、それはそれでいい旅になりました。

また、周囲から隔絶されたこの別子山村に最短距離の新居浜からのバスが来年には通うという。

過疎のすごさが頭の片隅にあつたが、本当に良かった。

次回は 様子もわかったし、ぜひ 銅山越の古道に眠る別子銅山遺跡を訪ねたい。

